

平成 30 年度 学生による授業評価結果報告

本年度も学芸員課程の全授業について、履修学生による授業評価の調査を行いました。授業を行う教員にほぼ異動はないものの、その授業を受ける学生たちは、毎年入れ替わりがあることから、評価の数値に変化が見られることは当然と考えられます。今回の評価で、前年度との比較において注目されたのは、平成二十九年度前期において、「学習内容のレベルは適切でしたか」という項目です。適切・やや難しい・難しいという項目の合計が 92.94 パーセントであったのに対して、平成三十年度前期では、合計が 96.02 パーセントとなっており、全体として難解という印象を学生が受け止めていると考えられます。一方、「学生の理解度を確認しながら授業が進められていましたか」という質問項目については、平成二十九年度前期においては、ややそう思う・そう思うという項目の回答の合計が 73.45 パーセントであるのに対して、平成三十年度前期については、63.68 パーセントとなっています。授業内容の難易度と、教員の教え方については、当然、密接な相関関係が存在すると考えられ、授業に取り組む教員は、常に授業内容に細かい配慮を行うとともに、その教え方についても、学生一人一人の個性や能力に合わせた「匙加減」とも言うべき細心の注意を払う必要があるでしょう。ただし、「教員は授業に対して意欲的だったと思いますか」という質問項目については、平成二十九年度前期が、ややそう思う・そう思うという項目の回答の合計が 93.36 パーセントで、平成三十年度前期が 90.05 パーセントといずれも九割を超えており、学芸員課程全体として学生からの高評価を得ていることも指摘しておかなければなりません。

後期については、「テキスト、配布資料などは、効果的なものが使用されていたか」という項目が注目されます。すなわち、平成二十九年度では、ややそう思う・そう思うという項目の回答の合計が 76.69 パーセントとであったのに対して、平成三十年度は 59.55 パーセントと、かなりの低下を示しています。これがどのような要因に起因するかは、この程度の調査では浮き彫りにすることは不可能ですが、推測の一つとして、先に上げた学生の理解を確認するという授業への配慮が、これらの数値を左右する可能性は否定できません。また、授業を受けた学生側に目を向けるなら、「宿題・課題、予習・復習にかけて勉強量はどれくらいでしたか(1回の授業あたりの平均として)」という項目について、平成二十九年度後期については、1時間程度・2時間程度・3時間以上という項目の合計が 36.02 パーセントだったのに対して、平成三十年度後期の場合、同様の項目の合計が 38.67 パーセントと数値をわずかに上げています。授業の難易度、授業の仕方とともに、こうした課題に取り組ませることで、学生の学習はより深まると考えられ、各教員にはこうした取り組みをさらに深めていただきたいと思います。

最後に、授業評価の数値の変動は、むしろ向上することが望ましいところですが、教員の交代などの事態を別にすれば、入れ替わりがあるとはいえ、専修大学の学生という風土の中で、ある程度固定化された一定の数値を挟んで微妙に振幅する性質のものとも考えられます。とすれば、単年度の結果に一喜一憂するだけでなく、長い年月を掛けて、全体の平均数値を少しずつ改善させる具体的な努力に結びつけるのも、授業評価の重要な役割と考えられます。